

# NEW SONG

新生讃美歌ニュースレター

## 聖書に見る讃美の可能性

斉藤信一郎（平針教会・教会音楽専門委員）

讃美は多くの可能性を秘めた神様からの賜物だと思います。讃美とは神様の存在そのもの、あるいは神様の素晴らしい御業をほめ讃える神への応答であり、礼拝であり、祈りです。これに留まらず、讃美には実に様々な役割があることを聖書は直接的また間接的に教えています。

出エジプト記15章1節～18節は別名「海の歌」とも呼ばれる非常に古い讃美の一つであり、イスラエルの民が全能の神の御業によって紅海を無事渡り終えた時に歌ったとされる讃美です。特徴として「主はわたしの力」、「わたしの歌」、「主はわたしの救い」など自分たちの主を様々な呼び名で表現しています。神の御業によって奴隷状態から自由にされるという神体験を通してイスラエルの民が見出した様々な神の名を生き生きと表現しています。讃美はこのような神の恵みに対する自由で自発的な応答です。しかも、それは一度切りのことに留まらず、その御業が個人あるいは集団にとって重要であり、共感できるものであればあるほど歌い継がれていくものとなります。讃美は神体験を他の人と共有したり、他の人に継承していくためにも有効であると言えます。

ネヘミヤ記12章27節～47節には幾多の試練を乗り越えてエルサレムの城壁がようやく修復され、奉献礼拝が行われた時の状況が語られています。ここには今日でいうところのオーケストラ（シンバル・豎琴・琴27節）、聖歌隊（合唱隊31節）やフルタイムの音楽スタッフ（詠唱者の頭46・47節）が登場します。彼らとその務めを果たすために事前に身を清めてその奉仕に備え、計画が打ち合わされてリハーサルを重ねて本番に臨んだことが伺えます。43節によると当日の喜びの声は遠くまで響いたとあります。よく準備し整えられた礼拝讃美チームだったからこそ、そこに臨んだ人々の礼拝スピリットに一層火がついたのではないかと思います。礼拝に臨むに当たっての心構えや準備、また職務分担して奉仕していくことの大切さなどについても考えさせられます。讃美は信徒を神礼拝・神への共同奉仕へと導きます。

使徒言行録16章25節～34節にはパウロとシラスがピリピで鞭打たれて投獄された時のことが語られています。体に激痛が走り、歌う気力が失せて当然の場面で彼らは讃美し祈りました。讃美は、礼拝堂において喜びに溢れた時にのみ神に捧げるものではなく、いついかなる場所、また苦しい試練の真ただ中にも神に捧げることができるものであることが語られます。しかもこの彼らの行動は周りの囚人たちや看守にも福音に心を開くきっかけを作るといった役割を果たしています。

このように、讃美を通して私たちは神様の豊かな人格と御業に目を向けさせられ、神礼拝へと整えられ、あらゆる機会にキリストの証人として証しする者とされていくことが分ります。讃美の豊かな可能性について、共に8月に行われる全国礼拝音楽研修会でさらに分ち合えたらと思います。

# 新生讃美歌と私

～新生讃美歌53年のあゆみから～

## 第11回 「読みやすい楽譜を求めて」

繁田 卓也

『新生讃美歌』編集委員・楽譜作成担当者

1992年。この年は、私の音楽生活にとってある意味、ひとつの転機となった年でした。

1981年に私は、楽譜関係の出版プロダクション（ヤマハなどの出版社の下請け。）に入社しました。まだコンピューターは出版界にあまり入ってきていませんでした。文字原稿ですら、ワープロ入力したものをそのまま出す「電算写植」がまだ主流にはなっていませんでした。ですから、毎日が紙とカッターと糊とインクの作業。パソコンを使って楽譜版下を作るソフトの試作品が会社にも置かれてはいましたが、とても実用になるようなものではありませんでした。

1992年、コンピューター音楽を作曲する先輩に魅せられて行った母校のコンピュータースタジオでたまたま見たのが、フィナーレという楽譜浄書ソフトでした。なにしろ、電子楽器の鍵盤から音を入力すると、印刷されたような楽譜が出てきます。特に、印刷楽譜は前後の音符の間隔がきわめて微妙に調整されているものですが、それも自動調整。スラーもきれい。さっそく貯金をはたいて、マッキントッシュとこのソフトを買ったのでした。

『新生讃美歌』の編集委員として依頼を受けた私は、作曲に関わってきた者として、音符、特に伴奏和声（和音と各パートの音のつながり）の修正に力を入れたいと考えました。旧『新生讃美歌』には和声的にあまりきれいでないものが含まれていると、気になっていたからです。しかし、すべての曲の和声を修正するには、委員会の時間が足りません。そのため、原則としてすでに出版されている楽譜の和声をそのまま使うことになりました。

その一方で、『新生讃美歌』はコンピューターを使って制作しようということになり、こちらの方に力を注ぐことになっていきます。新しい『新生讃美歌』が大きく依拠した、南部バプテストの賛美歌集『The Baptist Hymnal』は、幸いフィナーレを使って作られていましたから、データを取り寄せ、これを使いやすい形に直してから、日本語の歌詞を入力します。データのないものは、一からの入力になります。

なるべく読みやすい賛美歌を作りたいというのは、ひとつの目標になりました。なるべく大きな楽譜、大きな文字を試みますが、一方ではページ数が増えれば重くなるし印刷代もかかります。

さらに、できるものは一番上の五線ももちろん、一番下の五線も位置が同じになるように、各ページのレイアウトをそろえていきました。（たとえば1番から5番までをご覧ください。）

文字の太さにも気を使いました。私が出版社にいた頃の主流は、中明朝と呼ばれる太さの明朝体。一方、当時マッキントッシュで一般に使われていたのは、細明朝と呼ばれる、より細かい文字でしたから、これでデータも作成しました。しかし、細明朝は元来がもっと小さな文字の大きさで威力を発揮する字体ですので、賛美歌に使われる大きさでは中明朝のほうが可読性が高いだろうと、実験してみました。その結果、中明朝に変更することになり、ひとつひとつファイルを開いて全部変更することになりました。

---

 ~ 新生讃美歌のあゆみ ~

日本バプテスト連盟創立	1947年
「新生讃美歌」	1957年
「新生讃美歌」	1963年
「新生讃美歌」改訂版	1966年
「新生讃美歌」	1982年
「新生讃美歌」	1984年
「新生讃美歌」	1989年
「新生讃美歌増補」	1997年
「新生讃美歌増補」	1999年
「新生讃美歌」	2003年

---

同じように、五線や音符の「ぼう」、小節線の太ささも工夫しました。フィナーレはとても優秀なソフトですが、フィナーレの最初の設定通りでは、楽譜職人が作ったような絶妙な線の太さのバランスにかないません。音符の「たま」も、フィナーレの規定より1割がた大きくしました。

楽譜の作成で苦労したのは、音符のレイアウトです。前述のように欲張っていましたが、当然どのページも、空間的な余裕がありません。特に、上下の余裕がないのです。音符の「ぼう」を短くすればいいようなものですが、限度があります。特に、単独の(連桁でない)「はた」の付く8分音符や16分音符は、「はた」を小さくすることができませんから、「ぼう」も短くすることができません。

518番の最後の段のレイアウトがおかしいとご指摘を受けたことがあります。鋭いご指摘です。確かに、前半が詰まりすぎていて、後半が緩すぎるのです。しかし、これはわざとなのです。こうすることで上の段とうまく符尾が互い違いになって、上の段との間を詰めることができたのです。これが詰まらないと、この曲が1ページに入りません。というのは、アルトが低くてテノールが高いこと、3段目に男声向けの歌詞があることなどから、どの段も女声(右手)の段と男声(左手)の段の間を広く空けざるを得ないからです。他にも、654番のように歌詞を左右にずらしてスペースを稼いだものもあります。

賛美歌集ができてから今度は、CDを出したいという話が持ち上がりました。平均的な賛美歌は、4分音符120のテンポで4分の4拍子、16小節。32秒です。4節なら2分。680曲で23時間、単純計

算でCD17枚です。この量は現実的でありません。練習から録音まで、時間的な問題、場所的な問題も発生します。一方、コンピューターで再生できるMIDIデータですと、ゆうゆう1枚のCDに入り、データもフィナーレが作ってくれます。また、すでに一部は『新生讃美歌』のホームページで使っていますから、使い回しがききます。多くの方からこの提案に反対するご意見もいただきましたが、より現実的な方法としてご理解をいただくことができました。ところがコンピューターは、データだけでは動きません。データを使うためのソフトが必要です。アプリケーションソフトの作成には特別なスキルが必要で、これは外注かと思いました。しかし、あえてアプリケーションを作らなくてもインターネットブラウザを使えば必要が満たされることがわかってきました。最近のブラウザはきわめて多機能ですから、これを利用して検索機能もつけることができました。

私が出版に関わった頃と、『新生讃美歌』の制作時期とでは20年しか違いませんが、コンピューターの進歩によってその実作業には隔世の感があります。もし今、『新生讃美歌』を作成するなら、もっと変わっていただろうし、これからも変わっていくのでしょうか。しかし、歌詞を、曲を、楽譜を、本を、賛美歌を、作者者が大切にしなければならぬことは、変わらないと思います。

委員の先生方、事務局の先生方、実作業に当たってくださった多くの方々から感謝いたします。そして、賛美歌が歌い続けられ、主が賛美され続けられることを心から願っています。

## 第7回全国礼拝音楽研修会へのお誘い

2010年8月23日～25日(月～水) 於:天城山荘

基調講演講師: 濱野道雄(日本バプテスト連盟宣教研究所 所長)

宣教部 教会音楽室では、礼拝を、また、礼拝の中での賛美の役割を考察し、音楽担当者の果たす奉仕のあり方について「礼拝音楽研修会」を通じて研修してきました。そして、実際の奉仕にあたるためのスキルアップとして、分科会での実技研修を行ってまいりました。

第7回全国礼拝音楽研修会では、これまでの研修会を踏まえ、より深い研修と交わりを目的に、天城山荘での2泊3日の研修会を準備しております。この研修は、音楽担当者の為だけの研修ではなく、牧師先生方、また、礼拝を支え奉仕されている執事役員の方々など、たくさんの方にご参加いただき、一緒に礼拝を考える場として活用して頂きたいと願っています。

### 研修会テーマ: へだてを超える礼拝 ～わたしたちの献身～

現代の私たちの教会は、たくさんの課題を抱えています。「若い人との音楽的なギャップを感じる」「外国に方々とともに礼拝を守っていきたいが、言葉などのギャップがある」...

そんな「へだて」を超えていこう! 超えていくためには何が必要なのでしょうか。そこには明確な答えがあるわけではありません。しかし、私たちは研修を通じて考え、実践していきたいのです。一緒に交わり、考えていきませんか? ぜひ、ご参加ください。

今回の研修では、音楽奉仕者のための実技分科会のほかに、司式者・司会者のためのコミュニケーション法の実践分科会、また、新しい賛美を育てていくために作詞を学ぶ実技分科会などを準備しています。実技分科会に加え、現代の神学と賛美を考察する、牧師と音楽担当者がチームとなって礼拝を創り上げる、など、日々の礼拝に直結する学びを目的にしたゼミ形式の分団討議の時間も設けています。

#### 分科会: コミュニケーション

講師: 川平朝清(青葉)

礼拝での司式・司会者は、礼拝の中でのような姿勢で臨み、また、何が託されているのでしょうか? 「伝える」司式、司会ではなく、「伝わる」司式とは何かを分科会の中で分かちあい、コミュニケーション法を視点にして実践していきます。礼拝で司式・司会の奉仕を担っている皆様、ぜひご参加ください。

#### 分科会: 教会形成と賛美歌 (賛美歌創作)

講師: 吉高 叶(栗ヶ沢)  
福永保昭(相模中央)

賛美歌の歴史は礼拝での賛美をどう献げるか、またその神学を表すものとして時代ごとに新しい賛美歌が生み出されてきました。『新生讃美歌』の50余年の歩みも伝道と礼拝を中心に賛美歌集を発行を続けてきました。『新生讃美歌』(2003)発行後も、その歩みは続いており、今起こっている宣教課題にも目を向け、新しい賛美を生み出すことが継続して求められています。第7回は「教会形成と賛美歌」と銘打って新たに分科会を企画しました。教会に必要な言葉(詞)とは何でしょうか? 教会形成を意識して作られた賛美歌を参考にしつつ、わたしたちの「今」求められている賛美歌をともに探っていきます。